

仮面の告白

—— 映画文学人生論

原作：三島由紀夫 (1949) 「河出書房」
参考：『花ざかりの森』 (1944) 「七丈書院」
『潮騒』 (1954) 「新潮社」
『金閣寺』 (1956) 「新潮」
『憂国』 (1961) 「小説中央公論」

永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言いつ張っていた

小説を読むと、自分の気分になつたくなじまない異質な感覚や思想に抵抗を感じることもある。私が経験したささやかな例をあげれば、芥川龍之介『羅生門』、カミュ『異邦人』、そして三島由紀夫『仮面の告白』。

「永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言いつ張っていた」と『仮面の告白』の主人公はいう。産湯（うぶゆ）を使わされた木肌の盥（たらい）のふちのところにほんのりと光りがさしていた。そのところだけ木肌がまばゆく、黄金でできているようにみえたという。信じられない。私は生れたときの光景なんかなにも覚えていない。かすかな記憶が残っているのは三歳になつてからだ。

主人公が五歳のとき、この世にひりつくような或る種の欲望があるのを予感したというのも理解に苦しむ。そのきっかけになつたのは坂を下りて来た若者の姿だったが、その若者はなんと肥桶を前後に荷（にな）い、汚れた手拭で鉢巻をした汚穢屋（おわいや）——糞尿汲取人だったという。

十三歳のとき、ルネッサンス末流の耽美的な画家がえがいた聖セバスチヤンの殉教図にひかれたというのは理解できないこともないが、五歳のとき、坂を下りてくる汚穢屋の若者を見て或る種の欲望を予感したというのは私には理解できない。



仮面の告白

映画文学人生論

しかし、小説を読み進めているうちに、この作者の頭のよさがふつうではないことがわかる。小説の主人公は官吏登用試験に合格し、大学を卒業し、ある官庁に事務官として奉職した。それだけでも秀才にちがいないが、その上、この小説を書いている。小説の文章と構成から判断すると、彼は単なる秀才ではなく、天才かもしれない。生れた直後の記憶も覚えていても不思議ではないという気分に読者は誘導させられる。

いったいどういう遺伝子を受けつぎ、どういう教育をほどこせば、こんな天才が育つのだろうか——その疑問をとくヒントも書いてある。

主人公は関東大震災の翌々年の大正十四年に生まれ、昭和二十年に敗戦を迎えたときは二十歳。ふつうの時代ではない。家庭もふつうではなかった。彼は古い家柄の出で、狷介不屈（けんかいふくつ）な、或る狂おしい詩的な魂の持主である祖母に溺愛されて育った。脳神経痛が彼女の神経を蝕んでいたが、同時に無益な明晰さをそれが彼女の理智に増したという。

主人公の頭の良さと女性に欲望を抱かないという倒錯のそもその原因は祖母の脳神経痛（祖父の壮年時代の罪の形見）によるものだというのだが、それも仮面の言うことだから信じてよいかどうか。作者の三島由紀夫には一男一女がいる。

三島忌や腐りやすきに國も亦 高橋睦郎